＜福島県知事賞＞

社会から求められるヒーロー

いわき市立内郷第一中学校　三年　鈴木　愛翔

朝が来て目が覚める。支度をして、家を出る。道は舗装されておらず、雑草は荒れ放題、ゴミも散乱している。やっとの思いで着いたと思えば、そこは私立の中学校。金儲けに走った学校の授業料は高く、教科書や教材は自費で賄わなければならない。授業が終わり、再び、あの道を歩く。帰宅すると、家の中が荒れていた。泥棒が入ったのか…。警察がいないから仕方がない。この町では、火事が起きても消防車は来ない。大雨が降ったら、川が整備されていないため氾濫する。犯罪を犯しても捕まることはない。誰も、このような世界になることを望んでいないはず…。

「税金」がなければ、生活は成り立たない。警察、消防、ゴミ回収、公立の学校。身の回りのあらゆるものは税金により賄われている。しかし、中には税金を払うことをあまり快く思わない人もいる。

日本は他国と比べて、税金が嫌いだと思う人が多いと言われている。理由としては、税金によって自分が支えられているという実感がないことらしい。高齢者や生活困窮者などへの福祉は手厚いイメージがあるが、その分、他の多数の国民は、自分たちは恩恵を受けていないという不公平感を持っているのだ。しかし、この考えは間違っていると思う。人々は税金の恩恵を当たり前だと思っているため実感がないのだ。学校に行けるのが普通、警察は呼んだら来るのが当然。その普通、当然こそが、税の恩恵なのだ。私がこのような考え方に至ったのは、この作文を書くに当たって、税金がこの社会に与えている良い影響を理解したからだ。また、人々が税金を嫌うのは、自分の利益が減るという意識があまりにも強いせいでもある。現に、この表れとして、脱税などといった税に関する犯罪が多発している。このような犯罪を防ぐためにも、税金の使われ方をより詳しく、多くの人に知ってもらい、税金により社会が成り立っていることを自覚してもらう必要があると思う。

私はまだ、本格的な納税者ではない。大人になれば、所得税を始めとした、さまざまな税を納めることとなる。今よりも、ずっと税を身近に感じることができるだろう。よって、私も税に嫌悪の情を抱いてしまうこともあるかもしれない。そのような黒い自分に声を掛けられるとしたら、私はこのように言いたいと思う。

「今の私は実に、豊かに暮らすことができている。それは、顔も知らない大人たちが、必死に働いてくれているからだ。この恩義に報いなければならない。次は君が社会を支える番だ。君の納めた税は、警察が治安を守るために使われるかもしれない。消防が人々を救うために使われるかもしれない。君は縁の下の力持ち、社会のヒーローだ。ヒーローは、人々から求められる存在。つまり、君は社会から求められているんだよ。」

と。